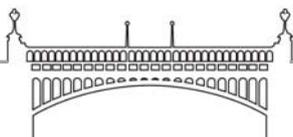

堀川まちづくり構想

～“うるおいと活気の都市軸・堀川”を再び～

堀川 ^{つながる} × ひと ^{つながる} × まち



平成24年10月
名古屋市



“市民の誇りとなる川・堀川”をめざして



名古屋城の築城とともに誕生した堀川は、尾張藩の領地だった木曾の山から伐り出した木材の運搬、貯蔵のほか、領内から運ばれてきた米、野菜、魚といった生活物資の運搬に使われるなど、人々の暮らしを支える川でした。また、豪華なまきわら船が浮かぶ船祭りが行われたり、日置橋では桜や桃の見物のためたくさんの人でにぎわうなど、名古屋の文化を育んできた川でもあります。その後も、明治、大正、昭和と時代が移るなか、名古屋の近代化を支え、発展の土台となるなど、堀川は、まちの歴史と共に歩んだ“名古屋の母なる川”であります。

そんな堀川も、産業の発展に伴う工場廃水や生活排水によって水質が大きく悪化し、臭い、汚い川として、一時は市民の皆さんからそっぽを向かれる存在になってしまいました。

これをなんとか再生させようと、これまで河川の整備や水質浄化に取り組んだ結果、堀川は以前と比べて随分きれいになり、市民の皆さんが様々な活動に取り組んでいただけるようになってきました。

しかしその一方で、名古屋市では“まだまだ、これくらいでは足りないぞ”という市民の皆さんからの熱い期待を感じており、このたび、堀川のより一層の発展と母なる川の再生に向けて「堀川まちづくり構想」を策定しました。

この構想では「堀川」と「ひと」と「まち」が“つながる”ことをテーマにしています。堀川で活動する皆さんの“つながり”によって浄化の活動が活性化され、また、周辺のまちや歴史資源と堀川の“つながり”によってにぎわいが創出されるなど、様々な“つながり”が相乗効果を生み、堀川の魅力が加速度的に広がっていくことを目指していきます。何といたっても、つながる組み合わせも可能性も無限にありますので、皆さんと一緒に、市民の誇りとなる、おもしろい堀川にしていきたいと思っています。

なお、構想の策定にあたりまして、熱心にご議論いただきました堀川まちづくり協議会の委員の皆様、同幹事会の幹事並びににぎわい部会に参加していただいた市民団体の皆様、さらに、貴重なご意見をお寄せいただいた市民の皆様に対し、心より感謝を申し上げます。

平成24年10月

名古屋市長 河村 たかし

目次

1章 はじめに

1. 構想策定の背景	2
2. 構想の位置づけ	4
3. 堀川まちづくり構想とは	5

2章 堀川の歴史と現状

1. 堀川のなりたち	8
2. 堀川および周辺の歴史・文化資源	12
3. 堀川における取り組み	16
4. 堀川の移り変わりと課題の整理	26

3章 構想の理念

1. 基本理念	30
2. 堀川力の向上に向けて	31

4章 堀川まちづくりの指針

1. 堀川まちづくりの6つのテーマ	34
2. 堀川まちづくりの指針	35
3. 拠点エリアの将来イメージ	56

5章 実現に向けて

1. パートナーシップによるまちづくり	78
2. 構想実現に向けた道すじ	79
3. 推進方策	81

参考資料

1. 策定経緯	90
2. にぎわいづくりのアイデアとヒント	94
3. ネット・モニターアンケートの概要	96
4. 堀川の水辺空間活用シンポジウム	98

1章 はじめに



1. 構想策定の背景

堀川は、名古屋城築城と時を同じくして開削され、以来 400 年間にわたって名古屋の歴史とともに歩み、人々の暮らしやまちづくりに密接に関わりを持ってきました。江戸から明治・大正・昭和初期にかけては物資輸送の大動脈として名古屋市民の生活を支え、また花見や水遊びなどを楽しむ憩いの場として人々の生活の一部となっていました。

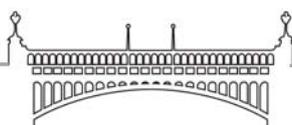
昭和初期から高度成長期にかけて、急速な都市の拡大や産業の発展による環境悪化や輸送手段の変化によって堀川のかつての活気は失われ、人々の生活が堀川から離れていきました。人々の関心が薄れるにつれてさらに環境が悪化するという悪循環を繰り返し、ついには堀川は「死せる川」と呼ばれるまでに至ってしまいました。

その後、都心の水辺空間が見直されるようになり、堀川の再生をめざして始められた護岸整備に合わせたヘドロのしゅんせつ、合流式下水道の改善、庄内川からの導水などによって水質の改善が進むとともに、堀川をとりまく環境への市民の意識も変わってきました。こうした意識の変化の表れとして、「堀川 1000 人調査隊」や「クリーン堀川」など、美しい堀川、楽しめる堀川をめざした市民団体が発足し、活動が活発に行われてきました。

昭和 63 年(1988 年)に魅力ある水辺空間の形成をめざす「マイタウン・マイリバー整備事業」が創設され、堀川はその第 1 号河川に指定されました。本市においては、“うるおいと活気の都市軸・堀川を再び”をコンセプトに、平成元年(1989 年)にまちと川が一体となった総合的な整備を図るよう「堀川総合整備構想」を策定し、平成 14 年(2002 年)3 月にはそのコンセプトを継承した「なごや・堀川プロジェクト 21」が堀川整備に関する懇談会から提言されるなど、マイタウン・マイリバー整備事業による河川整備を進めてきました。

魅力ある水辺空間整備が進むにつれ、こうした空間を利用した都市のにぎわい創出へのニーズが高まり、全国的にも河川とまちが一体となった環境づくりの取り組みが活発化しました。このような河川敷地利用に対する要請から、平成 16 年(2004 年)に国の通達により社会実験として河川敷地のイベント活用やオープンカフェ等の施設設置等が可能となる規制緩和が行われ、平成 23 年(2011 年)には「河川敷地占用許可準則」の改正によって本格的に運用されることとなりました。これを受けて、堀川では平成 17 年(2005 年)から納屋橋周辺においてオープンカフェやイベント利用が可能となり、多くの市民による河川敷地を利用したにぎわいづくりが進められてきました。

平成 12 年(2000 年)の河川法改正では、地域の特性を活かしながら、安全で魅力ある河川整備と流域の空間整備をより積極的に実施することを目的として、一級河川の指定区間を政令指定都市の長が管理することができるようになりました。堀川は、平成 19 年(2007 年)に河川管理権限が愛知県知事から名古屋市長に移譲されました。



まちづくりにおいては、これまでの行政主体から、多様な価値観を持つ地域住民や市民団体、企業などの主体が、行政との連携のもと、地域の特色を活かした魅力ある協働のまちづくりを進めていくことが一層重要になっており、平成 23 年(2011 年)に策定された名古屋市都市計画マスタープランでも戦略的まちづくりの展開として、積極的に地域まちづくりをすすめることとしています。

同年、地域の歴史資源を活かした、魅力的な都市環境の維持・形成に取り組むため「名古屋市歴史まちづくり戦略」も策定され、開削 400 年を迎えた「名古屋の母なる川・堀川」の歴史・文化を掘り起こし、これら沿川のまちの魅力と連携した新たな“都市軸”として再生する機運も高まってきています。

また、松重閘門で堀川とつながっていた中川運河でも“歴史をつなぎ、未来を創る運河 ～名古屋を支えた水辺に新たな息吹を～”をめざした中川運河再生計画が策定され、堀川と中川運河、名古屋港が連携した新たな都市魅力の向上が期待されています。

堀川では、現在も再生に向けた民・産・学・官の様々な活動が実施されており、これが堀川の持つ大きな力の一つとなっています。各団体は、それぞれのテーマを持って個別に活動し、テーマの共通する団体間の連携も見られはじめています。しかし、新たな魅力の発見につながる異なるテーマ間の連携や、堀川を軸とした一体的なまちづくりの展開には至っていません。そのため、各団体が堀川再生に向けた課題を共有し、連携によるまちづくりを進め、課題解決に向けて一体的に取り組むネットワークを形成することが望まれています。

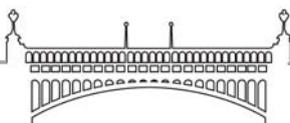
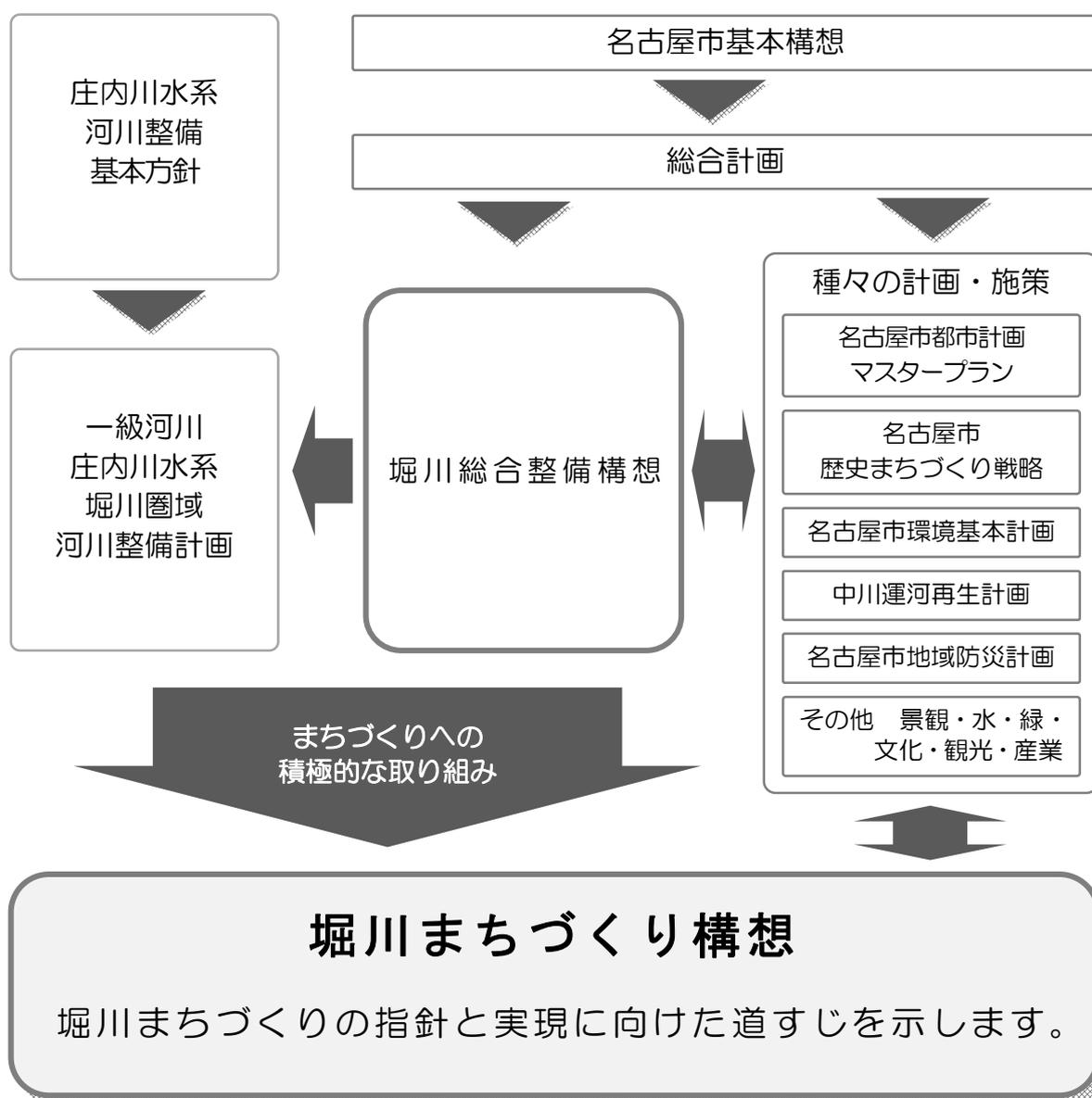
そこで、開削以来、名古屋の歴史とともに歩み、市民の暮らしやまちづくりに密接な関わりをもってきた堀川が、名古屋の母なる川として市民の誇りとなるよう、堀川開削 500 年に向けた長期的な展望を持ちつつ、ここに「堀川まちづくり構想」をとりまとめます。



2. 構想の位置づけ

これまで、堀川は、平成元年(1989年)3月に策定した「堀川総合整備構想」、平成22年に公表した「堀川圏域河川整備計画」に掲げた方針に基づき、計画的に整備を進めてきました。

「堀川まちづくり構想」では、これらの方針を踏まえつつ、「名古屋市都市計画マスタープラン」、「名古屋市歴史まちづくり戦略」、「中川運河再生計画」など関連する種々の計画・施策と整合を図りながら、堀川と周辺のまちが一体となった“堀川まちづくり”により、堀川が新たな都市軸としてさらに発展するための将来を見据えた指針とその実現に向けた道すじを示します。

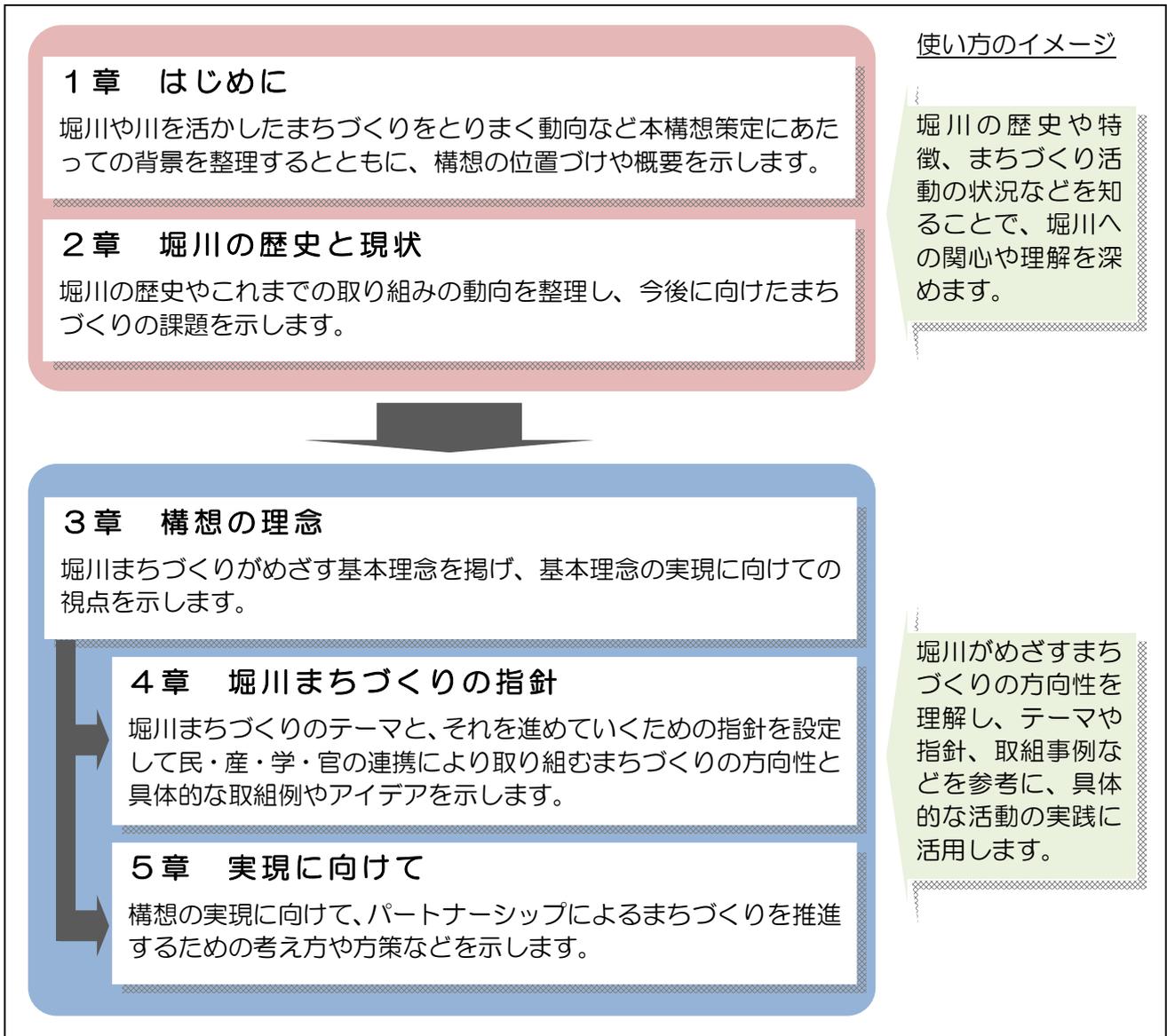


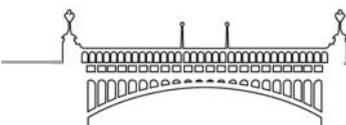
3. 堀川まちづくり構想とは

本構想は、名古屋城築城に合わせて開削され、以来 400 年間にわたり名古屋の歴史とともに歩んだ堀川と、その周辺の歴史・文化資源、まちづくり、市民団体の活動など、堀川をとりまく様々な資産を「民」「産」「学」「官」の協働によって“掛け合わせ”、“つなげる”ことで、堀川と沿川の魅力とが融合し、だれもが主役となって、“名古屋の母なる川”堀川ににぎわいを創出し、その魅力を発信するための指針となるものです。

また、本構想にもとづき堀川での先導的な取り組みの一層の推進を図ることで、今後、名古屋市における様々な“川を活かしたまちづくり”につなげていきます。

堀川まちづくり構想は、次の5章で構成します。





2章 堀川の歴史と現状

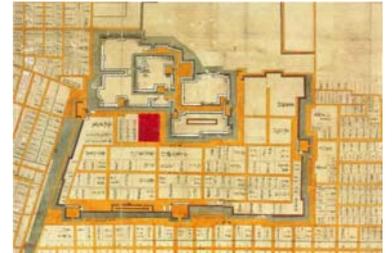


1. 堀川のなりたち

堀川は、慶長 15 年（1610 年）名古屋城の築城と時を同じくして福島正則により開削されたと伝えられています。当時は、名古屋城西の巾下と熱田宮の渡しを結ぶ延長約 6 キロの川でした。その後、上流部（黒川）の開削や下流部での新田開発などが進み、名古屋を南北に貫流する現在の堀川になりました。

年表

慶長 15 年(1610 年)	名古屋城築城に着手。慶長 17 年完成 福島正則、御普請惣奉行となり堀川開削に着手
16 年(1611 年)	熱田より辰之口まで舟入が可能となり、開削工事が終了
18 年(1613 年)	清須越がほぼ完了し名古屋城下町の基礎が完成
寛永 6 年(1629 年)	白鳥貯木場を整備(当時は、堀川東岸)
10 年(1633 年)	木ノ免・大瀬子(現:熱田区)に魚問屋 8 戸を置き、魚市場を開設
寛文 3 年(1663 年)	守山区竜泉寺下の庄内川から名古屋城のお堀まで御用水路を開削
天明 4 年(1784 年)	大幸川を堀川につなぐ工事を施行
文化 元年(1804 年)	御普請奉行堀弥九郎が、堀川の日置橋付近の両岸に、桃と桜の樹数百本を植樹
天保 7 年(1836 年)	住民による堀川の「冥加浚え」の実施
安政 7 年(1860 年)	長畝付近で桜の増植
明治 4 年(1871 年)	堀川に年々たい積する土砂を、愛知県が常例工事としてしゅんせつ
10 年(1877 年)	黒川の開削工事完了
19 年(1886 年)	愛船(株)の開業式開催(犬山と名古屋間の船による運送事業、大正 13 年廃止)
24 年(1891 年)	300 石以上の船舶は納屋橋上流、航行禁止
32 年(1899 年)	堀川河岸地共同荷揚場及び河岸地取締規則施行
39 年(1906 年)	堀川改修工事費を県会にて決議(工期 4 年)
43 年(1910 年)	新堀川開削工事完了
44 年(1911 年)	瀬戸電気鉄道(現:名鉄瀬戸線)の堀川と瀬戸の間が全通。堀川駅の営業開始
大正 2 年(1913 年)	納屋橋を鋼製アーチ橋へ改築
14 年(1925 年)	堀川の朝日橋から景雲橋、洲崎橋から山王橋のしゅんせつを愛知県が実施



享保 16～18 年頃の名古屋のまち
(名古屋図) 名古屋市蓬左文庫蔵



花見の名所でもあった堀川
(名古屋名所団扇絵「堀川花盛」)
名古屋市博物館蔵



堀川沿いの蔵(四間道)
(尾張名所図絵)

昭和 7年(1932年)	中川運河が全通し、松重閘門で堀川と接続
8年(1933年)	大幸川合流点から朝日橋の改修事業が完了
10年(1935年)頃	水質が悪化し、BODが35mg/L程度に
12年(1937年)	木曾川からの試験通水を実施(約1週間)
14年(1939年)	朝日橋から名古屋港の改修事業完了 木曾川からの試験通水を実施(昭和16年まで)
34年(1959年)	(社)名古屋清港会結成。堀川水面清掃開始 伊勢湾台風により大きな被害が発生
38年(1963年)	堀川浄化のため、庄内川から試験通水開始(昭和55年まで)
39年(1964年)	堀川口防潮水門完成
40年(1965年)頃	水質悪化のピーク
40年(1965年)	愛知県がしゅんせつ事業を開始(昭和48年度まで)
43年(1968年)	通行船舶の減少により中川運河の松重閘門を閉鎖
44年(1969年)	堀川を一級河川に指定
51年(1976年)	名鉄瀬戸線、堀川駅から土居下駅を廃止
58年(1983年)	流況調整河川木曾川導水事業に着手(平成12年中止)
63年(1988年)	マイタウン・マイリバー整備河川第1号の指定
平成 元年(1989年)	堀川総合整備構想を公表
6年(1994年)	ヘドロしゅんせつ工事開始
10年(1998年)	上飯田連絡線の地下鉄工事に伴う地下水の堀川への放流開始(平成13年8月まで)
13年(2001年)	庄内川から堀川へ暫定導水を開始
14年(2002年)	「なごや・堀川プロジェクト21」提言
16年(2004年)	水環境改善緊急行動計画(清流ルネッサンスⅡ)の公表
17年(2005年)	堀川ギャラリー(旧加藤商会ビル)オープン 納屋橋地区「オープンカフェ社会実験事業」実施
19年(2007年)	木曾川からの導水による社会実験を開始(平成24年3月まで。導水は平成22年3月まで) 河川管理権限が愛知県知事から名古屋市長へ移譲
21年(2009年)	納屋橋南地区市有地整備活用事業施設(ほとりす)オープン
22年(2010年)	一級河川庄内川水系堀川圏域河川整備計画を公表 開削400年記念事業を開催



松重閘門



元杵樋門



堀川環境整備事業(ヘドロ除去)



納屋橋周辺のにぎわい



堀川の変遷

① 川の開削

- ・ 名古屋城築城と同じ慶長 15 年(1610 年)、城下への舟運による物資輸送のため、海に面していた熱田と名古屋城下を結ぶ堀川(長さ1里半余り(約 6 キロ)、幅 12~48 間(約 22~87 メートル))が開削された。

②御用水の開削と大幸川の接続

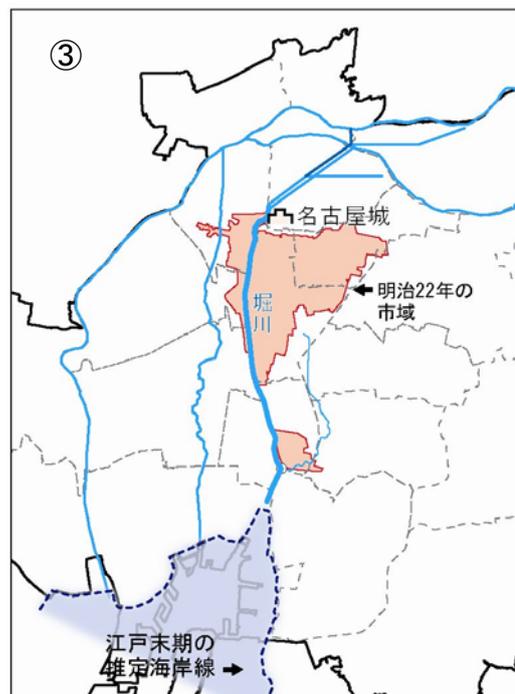
- ・ 寛文 3 年(1663 年)、名古屋城のお堀の水源として御用水が開削され、水源のなかった堀川に庄内川の水が流入するようになった。
- ・ 天明 4 年(1784 年)、浸水被害への対策として、大幸川と堀川がつながれ、堀川は北東へ延伸された。
- ・ 下流部では、埋立てによる新田開発が進められた。

③黒川の開削

- ・ 明治 9~10 年(1876~1877 年)、犬山と名古屋を結ぶ舟運と農業用水の取水を目的に、堀川にそそぐ黒川が造られた。
- ・ 明治以降、下流部での名古屋港築造や工業用地造成のための埋込に伴い、堀川も延伸され 16.2 キロの現在の姿になった。

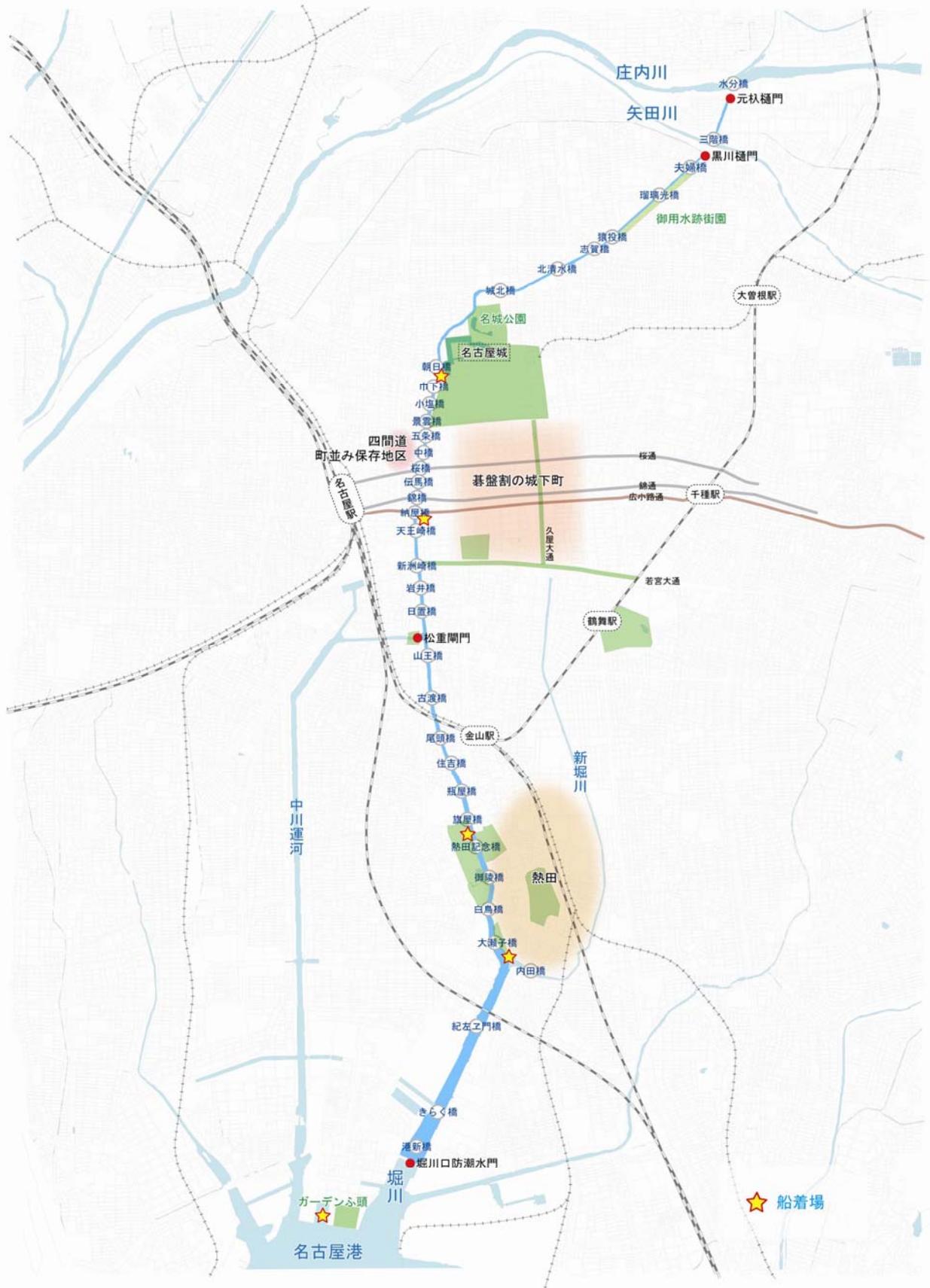


慶長 15 年(1610 年) 堀川の開削

寛文 3 年(1663 年) 御用水開削
天明 4 年(1784 年) 大幸川を接続

明治 10 年(1877 年) 黒川開削

④現在の堀川



2. 堀川および周辺の歴史・文化資源

400年間にわたって名古屋の歴史とともに歩んできた堀川とその周辺には、数多くの歴史・文化資源が点在しています。

主な歴史・文化資源

※上流から順に記載しています。

【黒川樋門】

庄内川から黒川(堀川)へ用水を引くために設けた樋門で、矢田川の地下を通り、ここから黒川へ流れ込みます。3連の樋門に2つの石段があり、巻上機の上屋は木造で復元されています。



黒川樋門

【御用水跡街園】

寛文3年(1663年)、名古屋城の堀と御深井の池に庄内川の水を引き入れるために開削されました。現在は埋め立てられ、遊歩道を主体として街園が整備されています。



御用水跡街園

【名古屋城】

慶長15年(1610年)徳川家康の命により築城開始。慶長17年(1612年)に天守、慶長20年(1615年)に本丸御殿が完成し、初代藩主徳川義直が入城。名古屋城はその壮美さから戦前には国宝に指定されていましたが、昭和20年(1945年)空襲で天守閣などが焼失しました。昭和34年(1959年)に天守が復元され、現在、本丸御殿の復元が行われています。



名古屋城

【五条橋】

名古屋城の築城に伴う「清須越」によって清須城大手口五条川にかかっていた橋を名称とともに移動させたものです。



五条橋

【那古野界隈・四間道】

堀川の水運を利用して米穀、塩、味噌、酒、薪炭などを城下町へ供給する商家が軒を連ねて繁栄してきました。現在でも下町情緒が残る貴重な地域であり「町並み保存地区」に指定されています。



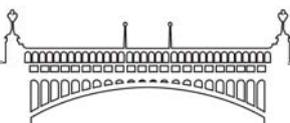
四間道

【西区ものづくり文化の道】

名古屋城の西側に広がるエリアで、名古屋扇子や名古屋友禅といった伝統工芸から菓子製造・卸などの近代産業、産業観光の拠点施設である産業技術記念館やノリタケの森、歴史的資産の四間道や美濃路、屋根神様など、名古屋が誇る様々な地域資源が集中しています。



産業技術記念館



【納屋橋周辺】

平成 17 年(2005 年)から、にぎわいの創出や魅力あるまちづくりのため河川敷地を活用したオープンカフェやイベント等が実施されています。



納屋橋周辺のにぎわい

【納屋橋（福島正則の家紋）】

慶長 15 年(1610 年)の堀川開削とともに架けられた「堀川七橋」の一つ。欄干には、堀川を開削した福島正則の家紋「中貫十文字」が鑄込まれています。



納屋橋・福島正則の家紋

【旧加藤商会ビル】

名古屋に本拠地を置き、主に外米などの輸入貿易を行っていた、加藤商会の本社として利用されていました。舟運の利用に適していたため、納屋橋のたもとに建てられており、川に面した地下階にも出入口が設けられています。大正期の建築意匠の特徴がうかがえ、国の登録文化財に指定されています。



旧加藤商会ビル

【日置橋】

日置橋周辺は桜の名所として有名であった場所で、名古屋名所団扇絵の「堀川花盛」にも描かれています。江戸時代には花見舟が出て、岸には茶屋、料理屋もあったといわれています。



日置橋周辺の桜
(名古屋名所団扇絵「堀川花盛」)

【松重閘門】

昭和初期の中川運河の開通とともに築造された西洋風の閘門で、現在は閉鎖されています。市の指定文化財にも指定されています。



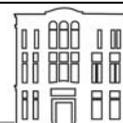
松重閘門

【白鳥貯木場跡】

木曽の山で切られた木が木曽川を下り筏に組まれて熱田に運ばれてきました。当時は堀川の河口であった白鳥に貯木場が設けられ、材木奉行が置かれました。現在は太夫堀の一部を残して埋め立てられ、公園等として整備されています。



白鳥貯木場の水門



【断夫山古墳・白鳥古墳】

ともに6世紀初頭に築造されたと考えられる前方後円墳で、熱田台地の西端に位置しています。断夫山古墳は全長151m、最大巾112mと東海地方最大の古墳で国の史跡に指定されており、白鳥古墳は古くから日本武尊やまとたけるのみことの墓であると伝えられています。



白鳥古墳

【熱田神宮】

三種の神器のひとつで日本武尊の神話に由来するといわれる草薙御剣が祀られています。神殿は伊勢神宮と同様の造りで、天照大神あまてらすおおみかみをはじめとする神々が祀られています。



熱田神宮

【宮の渡し】

宮～桑名間は東海道の中で唯一の海上路で、宮の渡しは尾張藩の海の玄関として栄えました。寛永2年(1625年)に常夜灯が建てられ船の出入りの目印となりました。(現在のものは昭和30年(1955年)に復元されたものです。)



宮の渡し

【名古屋港跳上橋】

臨港線のために1・2号地間運河に架けられた鉄道可動橋で、現在は上げたまま固定され国の登録文化財として保存されています。



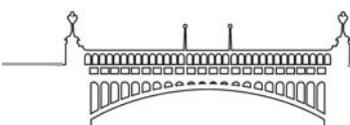
名古屋港跳上橋

【名古屋港ガーデンふ頭】

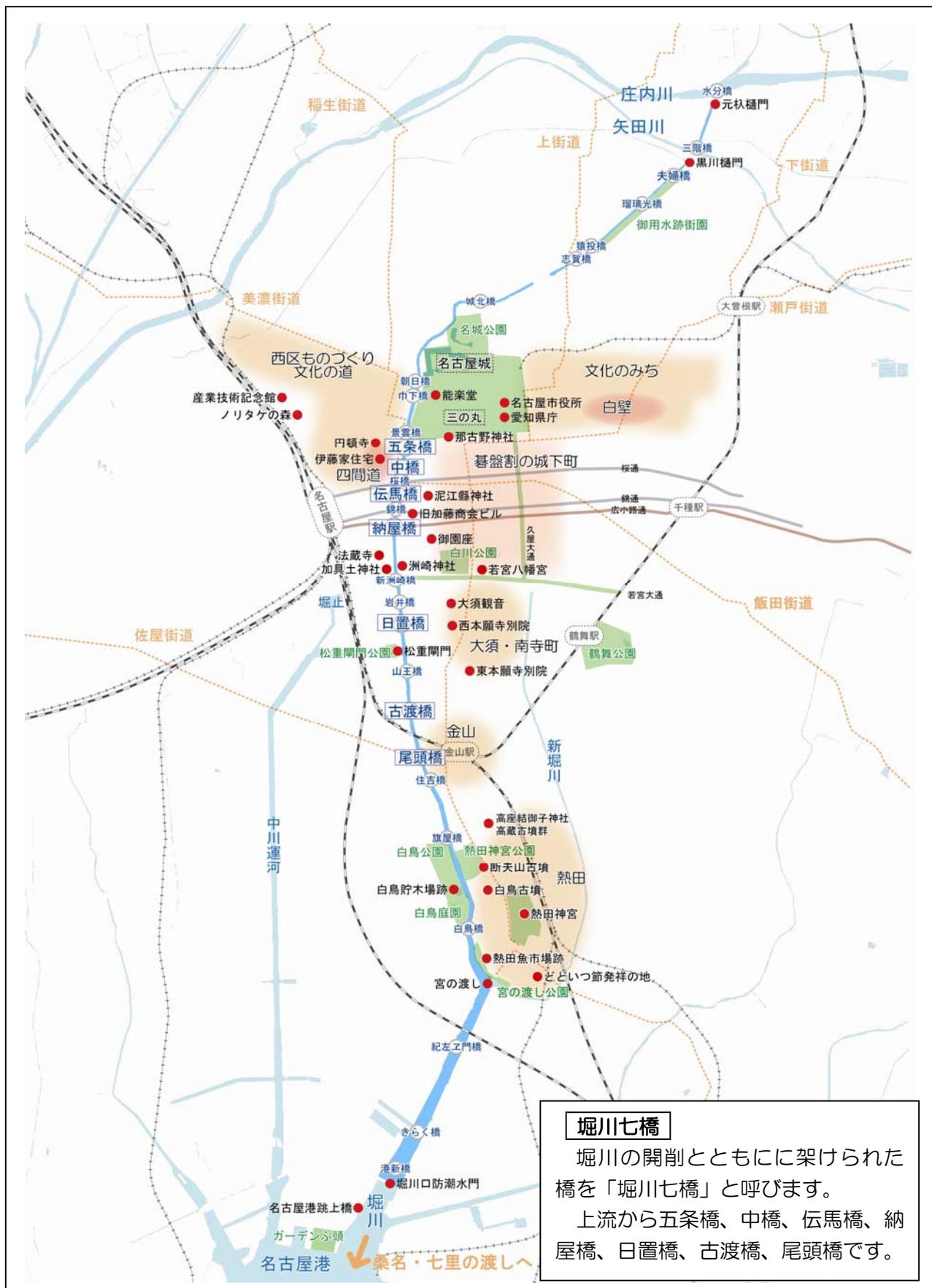
施設の老朽化や港湾機能の沖合展開に伴い、物流の中核的機能を果たしてきた旧2号地ふ頭を市民に親しまれる公園等として再開発を進めています。



名古屋港ガーデンふ頭



堀川および周辺の歴史・文化資源



堀川七橋
 堀川の開削とともに架けられた橋を「堀川七橋」と呼びます。
 上流から五条橋、中橋、伝馬橋、納屋橋、日置橋、古渡橋、尾頭橋です。



3. 堀川における取り組み

堀川では、河川整備や浄化の様々な施策が取り組まれています。また、市民活動や市民との協働によるまちづくり活動が行われています。

(1) 河川整備

名古屋市では、「うるおいと活気の都市軸・堀川」を再びよみがえらせることを目標とする「堀川総合整備構想」を平成元年(1989年)3月に策定し、堀川の総合的な整備の理念と実現への基本的な考え方を示しました。これに基づき、白鳥、納屋橋、黒川の3地区において先行的に整備に着手しました。また、平成14年(2002年)には、着手から10年が経過して3地区の整備に目途が付き、「なごや・堀川プロジェクト21」の提言を受けて、新たに松重、名城地区の整備に着手しました。

現在は、平成22年(2010年)10月に公表した「堀川圏域河川整備計画」に基づいて整備を進めています。

1) 整備地区

①白鳥地区

史跡や公園が点在しており、また、名古屋国際会議場を核とした「国際交流」の一面も兼ね備えている地域の特色を活かしつつ、公園整備など他の事業と連携しながら水辺空間の整備を進めています。河川沿いには連続した遊歩道が整備され、散策ができるようになっています。

②納屋橋地区

活気とにぎわいのある都心の水辺空間として回遊性を持たせるため、錦橋から天王崎橋まで川沿いに遊歩道を整備しました。また、船着き場の整備の他、旧加藤商会ビルを堀川に関する情報等の集積や展示を行うためのギャラリーとして整備し活用しています。

③黒川地区

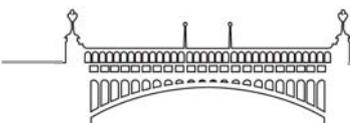
左岸側(川の南側)は、水辺近くに遊歩道を設置し、かつて船溜まりであったところを、その地形を活かして水辺まで降りられるようにするとともに、水に親しみながら憩うことのできる広場(北清水親水広場)としています。

④松重地区

松重閘門と広い水面を活かし、人々が集うにぎわいのある水辺空間づくりをめざしています。また、水辺の緑化による緑陰の創出に配慮した整備を進めています。

⑤名城地区

名城公園と接する区間では、公園との一体的な整備による水面への接近性を重視した親水広場と、水生生物や魚類の生息に配慮した護岸の整備を行っています。また、名古屋城周辺にある史跡を案内する施設を設置するなど、堀川の歴史と触れあえるような整備を進めています。





黒川地区（北清水親水広場）



名城地区（名城公園親水護岸）



納屋橋地区



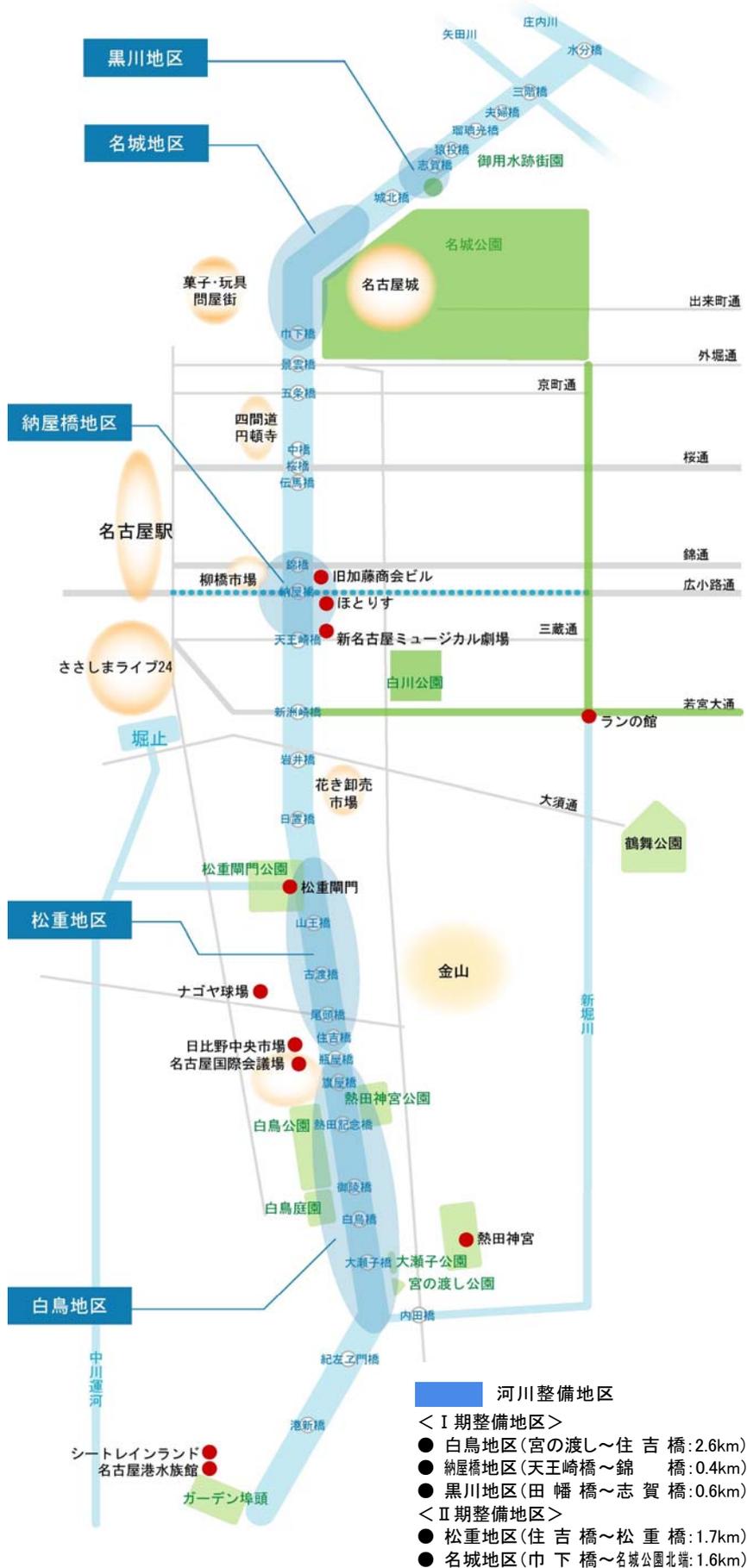
白鳥地区（堀川端プロムナード）



白鳥地区（白鳥プロムナード）



白鳥地区（千年プロムナード）



2) 堀川圏域河川整備計画

名古屋市では今後概ね 30 年間の具体的な河川整備の内容を示す「堀川圏域河川整備計画」を策定し、平成 22 年(2010 年)10 月に公表しました。堀川圏域(堀川流域と新堀川流域)では、関係機関や地域住民のみなさまと連携して、治水、利水、環境に関わる施策を総合的に展開していきます。

①基本理念

- 水害から市民を守る安全な川づくり
- 多様な魚や水生生物が生息し、都心の中で癒しの空間となる川づくり
- 周辺環境と一体で、都心軸を形成する川づくり

を市民とともにめざします。

②河川整備計画の目標

○洪水による災害の発生の防止・軽減に関する目標

- ・概ね 10 年に 1 回程度発生することが予想される降雨(1 時間雨量 63 ミリ)による洪水を安全に流下させます。

○流水の正常な機能の維持に関する目標(平常時の流量に関する目標)

- ・猿投橋より上流においては、維持流量の確保に努めます。(概ね毎秒 0.3 立方メートル)
- ・猿投橋より下流においては、可能な限り流量の確保に努めます。

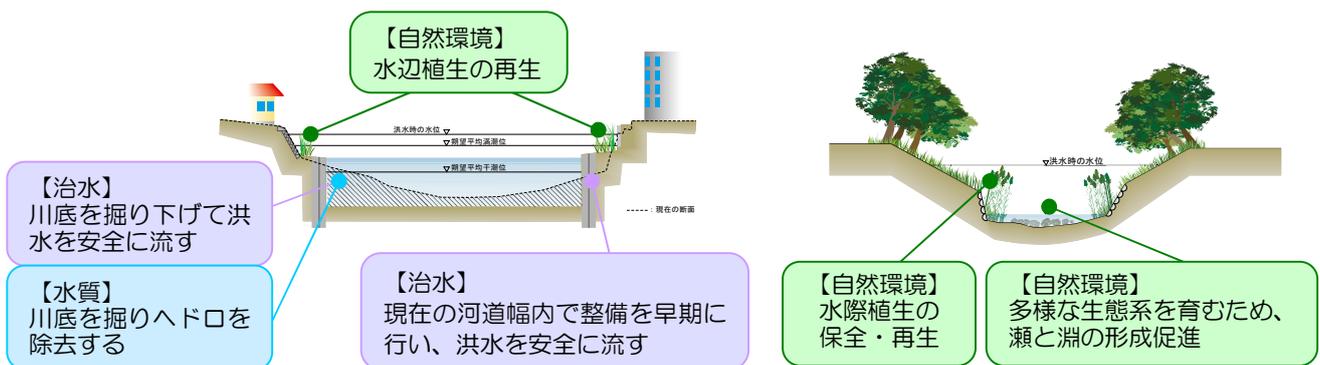
○河川環境の整備と保全に関する目標

- ・人と水生生物が共生できる望ましい河川環境の創出を図り、関係機関や地域住民と連携し、さらなる河川空間の利用促進に努めます。

【標準整備イメージ】

(堀川口防潮水門～猿投橋)

(猿投橋～元杵樋門)



3) 浄化・美化の取り組み

堀川における人と水生生物等が共生できる望ましい河川環境の創出を図るため、平成 16 年(2004 年)度に水環境の改善に取り組む名古屋市と河川管理者、下水道管理者及び関係者が一体となり、堀川水環境改善緊急行動計画(清流ルネッサンスⅡ)として平成 22 年(2010 年)度における目標を定め、これを達成するための施策が計画・実施されました。

水質の浄化・美化への取り組みには、「川をきれいにする」、「汚れた水を流さない」、「新たな水源を確保する」といった3つの要素があり、様々な施策に取り組んできました。

①川をきれいにする

堀川の汚れや悪臭の原因であるヘドロのしゅんせつを、可能な範囲で実施しており、引き続き河川改修に合わせて実施します。この他に、水中の酸素不足を補うための納屋橋下流での酸素供給装置の設置や、植生の創出として、河道内に葦などを植えることによる自浄機能の回復など水質改善を図っています。

美化活動として、水面の浮遊物を除去するため、城北橋下流に浮遊ゴミ除去施設を設置し、ゴミを回収しています。また、多くの市民団体や企業等による堀川周辺の清掃活動が定期的に行われています。



ヘドロのしゅんせつ

②汚れた水を流さない

堀川流域は、そのほぼ全域が汚水と雨水を同じ管で運ぶ合流式下水道で整備されているため、雨量が増加して一定量を超えると、路面など街の汚れや家庭からの汚水を含んだ雨水が堀川に直接放流されます。これに対処するために、一時的に雨水を貯留する雨水滞水池の建設や下水管内のごみ除去装置の設置などを行っています。

また、水処理センターでの下水処理の高度化などにより、川に排出される下水処理水の水質向上を進めています。



下水高度処理施設
(名城水処理センター)

③新たな水源を確保する

水源を持たない堀川の水質浄化を図る上で、水源の確保が重要で、これまで庄内川からの導水や、地下鉄の湧水、揚水井戸による地下水の活用などを実施していますが、今後更なる安定的な水源確保が必要です。

平成 19~22 年(2007~2010 年)の3年間、木曽川の清浄な水を長期間安定的に導水し、これによる浄化効果の確認を社会実験として行いました。行政と市民が協働して調査検証を行い、一定の浄化の効果が確認されました。こうした取り組みから、より多くの市民の水環境改善意識が高まり、上流の水源林や木曽川の保全、下流の伊勢湾の水質改善にも取り組むための活動が進められています。



庄内川からの暫定導水



4) 水質の現況

①水質の経年変化

堀川（小塩橋）における昭和38～平成22年(1963～2010年)までのBOD値と下水道普及率の経年変化を示します。(図 水質の経年変化)

水質悪化は昭和40年代前半がピークで、その後の下水道の整備進捗に伴って大幅に改善され、近年では、ほぼ横ばいとなっています。

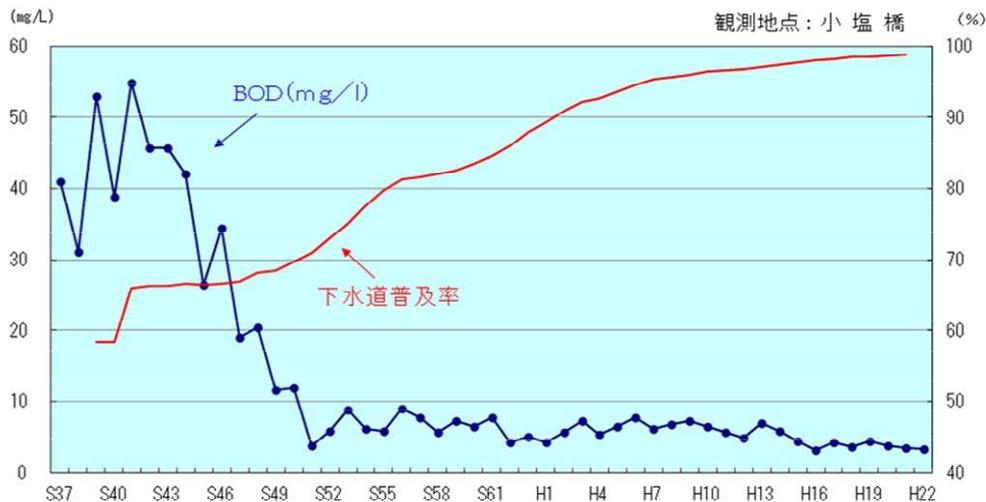


図 水質の経年変化

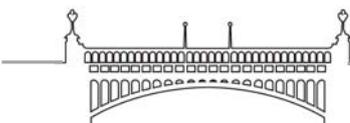
※ BOD（生物化学的酸素要求量）

河川の汚濁を表す代表的な指標で、値が大きいほど汚濁が著しいことを表します。

②水質基準と目標値

堀川は、環境省告示に基づいて設定された「水質汚濁にかかる環境基準」では、BODの基準値は8mg/L以下とされており、名古屋市告示に基づいた「水質汚濁にかかる環境目標値」では、元杵樋門から猿投橋までが3mg/L以下、猿投橋から松重橋までが5mg/L以下、松重橋から河口までが8mg/L以下と設定されています。また、堀川圏域河川整備計画では、元杵樋門から松重橋までが3mg/L以下、松重橋から河口までが5mg/L以下と更に高い目標を設定しています。

近年の様々な浄化の取り組みにより水質は少しずつ改善してきており、環境目標値を概ね達成してきていますが、場所や季節によって変動があり、一年を通して全体で目標を達成している状態までには至っていません。また、市民の皆さまからの堀川浄化への期待は大きく、今後も浄化施策の一層の推進が求められています。



(2) 堀川周辺のまちづくりへの取り組み

1) 名古屋市都市計画マスタープラン

長期的な視点に立って、将来の都市像やまちづくりの方向性を示し、地域住民・企業・行政などの協働によるまちづくりを進めるガイドラインとして、都市計画マスタープランが策定されました。この中で、堀川は「環境軸（緑と水の回廊ゾーン）」の一つに位置づけられており、身近な親水空間としての整備をすすめるとされています。また、まちづくりの重点的な取り組みを推進すべき地域に、堀川沿川のいくつかの地域が位置づけられています。

● 世界に誇る都心づくり

名古屋大都市圏の成長を牽引するため、都心域において、開発誘導・回遊性向上・にぎわい創出の相乗効果により、中枢機能の集積と広域交流機能の充実や風格と魅力ある都市空間の形成を図り、都心を再生します。

地域名：ささしま・名駅南、納屋橋・四間道

● また来たくなる名所づくり

人・歴史・文化の交流を促進するために、観光資源を有する地域において、観光資源と一体的なまちづくりを進めることにより、ホスピタリティの強化と市民の誇りとなる名古屋の魅力の醸成を図り、名所をつくります。

地域名：名城・白壁、熱田、築地

● 広域後背圏を有する既存拠点の再生

都市力・都市魅力を強化するために、広域後背圏を有する都心域周辺の交通結節点において、回遊性向上・にぎわい創出を図り既存拠点を再生することにより、後背圏との一体性と市街地のメリハリを確保します。

地域名：金山



2) 名古屋市歴史まちづくり戦略

開府 400 年(2010 年)を契機に、これまでの名古屋の歴史の積み重ねを振り返るとともに、開府 500 年を見据えながら、地域住民・行政をはじめとする様々な主体が協働して、身近に歴史が感じられるまちづくりに積極的・戦略的に取り組むために、歴史分野におけるまちづくりの基本方針として、歴史まちづくり戦略が策定されました。

この中で、「水の歴史を活かしたまちづくり」として堀川の再生が位置づけられており、黒川樋門、松重閘門などの歴史的建造物の保存・活用、歴史が感じられる水辺景観の形成や沿岸のにぎわい創出などが掲げられています。



3) にぎわいづくりに向けた取り組み

堀川やその周辺では、歴史や文化を活かしたまちづくりやにぎわいづくりに向けた様々な取り組みが行われています。

①名古屋城 本丸御殿の復元

昭和20年(1945年)の空襲で焼失し、近世城郭御殿の最高傑作と言われ国宝にも指定されていた本丸御殿を忠実に再現し、広く市民が活用でき、世界的な市民の財産となるように、平成21年(2009年)より復元工事を進めています。



②四間道・円頓寺のまちづくり

清須越とともに堀川端に商人町として形成され、現在でも江戸期の土蔵群と町屋が残る四間道地区周辺においては、歴史的資源を活かしたまちづくりが行われています。商店街と地域住民の手作りによる円頓寺七夕まつりも開催されています。



③さしまライブ24地区における市街地整備

名古屋駅の南に広がる大規模再開発エリア「さしまライブ24」。旧国鉄笹島貨物駅跡地の約12.4ヘクタールと中川運河堀止船だまり周辺を含むこの地区で、名古屋大都市圏の玄関口にふさわしい魅力と活気に満ちたまちをめざした取り組みが行われています。



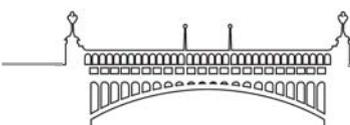
④ガーデンふ頭のまちづくり

名古屋港のシンボルゾーンとして整備され、臨港緑園、ポートビル、南極観測船「ふじ」、名古屋港水族館があり、市民の憩いの場となっています。



⑤沿川の親水空間整備

御用水跡街園遊歩道や白鳥地区のプロムナード、納屋橋地区のリバーウォークなどの散策路や北清水親水広場などの広場整備により親水空間の創出を図り、水に親しむ機会づくりを進めています。



4) 市民活動、市民との協働によるイベント等の取り組み

堀川を中心として、市民活動やイベントの開催など市民との協働による様々なまちづくり活動が取り組まれています。

①黒川友禅流し・黒川生物観察会

「黒川に清流を」の願いを込めて、桜の季節に黒川上流で市民とともに、地域に息づく伝統工芸「名古屋友禅」の糊落としを再現する催し「友禅流し」が平成 11 年(1999 年)より実施されています。

また、黒川ドリーム会が主催する生物観察会が 5~7 月に行われています。



②堀川フラワーフェスティバル

納屋橋付近の両岸を、市民の手づくりによる 400 基のフラワーハンギングバスケットで彩り、ゴンドラや花見船の運航、ミニコンサートやイルミネーションなど様々なイベントが平成 19 年(2007 年)より実施されています。華やいだ姿を復活させ、堀川再生への気運を高めています。



③堀川ウォーターマジックフェスティバル

堀川の持つ魅力を発見し、未来に向けた夢や可能性を市民に実験的に体験していただくことによって、堀川の浄化や堀川を活かしたまちづくりに対する市民の意識の高揚を図ることを目的に平成 15 年(2003 年)より開催されています。



④堀川まつり

NPO法人「堀川まちネット」と地域住民が協力して平成 2 年(1990 年)から継続的に実施しています。かつてこの地域で行われていた「熱田天王祭」を復活させようと、まきわら船や大山(山車)を手作りで再現しています。



⑤堀川 1000 人調査隊

堀川の問題点を、市民自らが見出し、考え、提案することによって堀川再生の足がかりとすることを目的として発足しました。活動を通じ、改めて堀川に対する市民の関心の深さを示し、堀川の問題点を広く市民に理解してもらおうきっかけとなっています。



(3) 堀川に関わる主なまちづくり活動団体

堀川及び周辺では、清掃活動やイベントの実施、調査・研究など、多くの団体が個性や特徴を活かしながら様々な活動を実践しており、団体間の連携もはじまりつつあります。

(掲載は50音順)

●愛知淑徳大学コミュニティ・コラボレーションセンター (活動範囲：全域／活動内容：イベント)

愛知淑徳大学の学生が学外の様々な地域のコミュニティに能動的に参加交流し、地域の皆さまとともに活動しながら、実践的な生きた知識や技術を学ぶことを支援する教育組織です。堀川フラワーフェスティバルや堀川ウォーターマジックフェスティバルでイベントブースなどを出店しています。

●クリーン堀川 (活動範囲：全域／活動内容：清掃、イベント、機関紙発行)

平成12年(2000年)3月に発足。市民グループ等からなる連合組織。美しい堀川、楽しめる堀川の実現や、堀川が身近に感じられるまちづくりをめざして、会員相互の情報交流や市民への広報活動を行っています。

●黒川ドリーム会 (活動範囲：堀川上流、三階橋～城北橋／活動内容：清掃、イベント)

北区を流れる黒川を拠点に、多くの鳥や魚が生息し、子どもたちの歓声が聞こえたかつての黒川に再生するため、清掃活動、イベント、小学生を対象とした黒川観察会などの活動を行っています。

●鯨城・堀川と生活を考える会 (活動範囲：全域／活動内容：調査、研究、イベント)

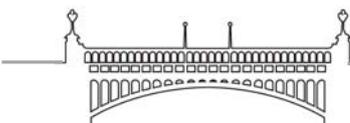
名古屋市の設置した高年大学「鯨城学園」環境学科の卒業生でつくる団体。堀川の浄化をめざして、水質調査(COD、アンモニア、PH、透視度、溶存酸素等)を定期的・継続的に調査して、市民への啓蒙活動を行っています。

●NPO法人 ゴンドラと堀川水辺を守る会 (活動範囲：全域／活動内容：イベント)

心ある市民の参加を呼びかけて平成元年に名古屋市が寄贈を受けたゴンドラの保存と水辺風景の美化緑化を目的に発足。堀川を中心に名古屋都市河川の環境再生活動を実施しています。

●名古屋堀川ライオンズクラブ (活動範囲：全域／活動内容：イベント、調査)

活動の主たる目的を「堀川の浄化、美化」に特化して結成されたボランティア団体であり、「名古屋の堀川を清流に」を合言葉に、堀川の美化、浄化に取り組むほか、堀川エコロボットコンテスト等のイベントを主催しています。



●**なやばし夜イチ実行委員会**（活動範囲：錦橋～納屋橋／活動内容：イベント）

錦橋たもとの「みのりの広場」を中心に、毎月第4金曜日にナイトマーケットを開催しています。物販やフードの他、いろいろなワークショップや写真、作品の展示、ライブなどを行っており、活気溢れる名古屋の魅力づくりをめざしています。

●**日本ハンギングバスケット協会愛知県支部**（活動範囲：錦橋～天王崎橋／活動内容：イベント）

ハンギングバスケットやコンテナ園芸などに関する知識、技術、海外情報などあらゆる情報を提供し、その普及と花の街づくりの推進に努めています。堀川フラワーフェスティバルでハンギングバスケットの製作指導、設置を行っています。

●**広小路セントラルエリア活性化協議会**（活動範囲：錦橋～新洲崎橋／活動内容：計画、整備、調査、研究）

「行ってみたい街、歩いてみたい街、住んでみたい街」を街づくり憲章と定め、国際性豊かなインターナショナル・アミューズメントタウンをめざして、計画策定、地区整備、調査研究に関する事業に取り組んでいます。

●**堀川再生フォーラム**（活動範囲：全域／活動内容：調査、研究）

堀川再生に係る諸課題の具体的解決をめざして各方面から調査・分析・考察を行い、年数回の研究会にて成果を公表し、皆様からご意見・ご指摘を受けることで研究成果を提言へとステップアップさせたいと考えております。

●**堀川1000人調査隊2010実行委員会**（活動範囲：全域／活動内容：調査、研究、イベント）

名古屋市の堀川浄化施策・社会実験の効果を市民の視線で検証するため、地道な調査活動を続けています。堀川を愛する人の輪を広げ、堀川の浄化・再生の早期実現をめざしています。

●**堀川文化探索隊**（活動範囲：全域／活動内容：調査、イベント）

名古屋の堀川文化をていねいに発掘して歩く会で、忘れられたもの、消えゆく文化を発掘することを目的として自由に参加できる会です。

●**堀川文化を伝える会**（活動範囲：中区／活動内容：イベント、調査）

名古屋独自の魅力ある歴史や伝統文化を、広く後世に伝えることを目的として、講演会・歩こう会・展示会・冊子の出版などの活動を行っています。

●**NPO法人堀川まちネット**（活動範囲：全域／活動内容：清掃、イベント、青少年育成）

歴史、伝承文化、環境保全を踏まえたまちづくりの推進を図り、広く市民や各分野の専門家及び海外との交流を深め、青少年の育成事業を推進しています。

（出典：各団体及び名古屋都市センター他のHP）



4. 堀川の移り変わりと課題の整理

1) 堀川の移り変わり

開削から現在に至るまでの堀川の移り変わりについて、以下に整理します。

江戸



<誕生～成長：開削、そして物流軸へ>

- 堀川の開削
- 熱田と城下町を結ぶ物流軸
- 米、塩、木材、海産物問屋の集積
- 日置橋周辺のにぎわい

明治
～
昭和初期



<発展：舟運とにぎわい>

- 舟運の発展、木材運搬軸
- 中川、新堀川の整備
- 黒川開削と分水池の天然プール

高度経済
成長期



<衰退：経済成長の陰、水質悪化>

- 舟運から陸運への転換
- 水質汚濁・都市排水
- 松重閘門の閉鎖

現在

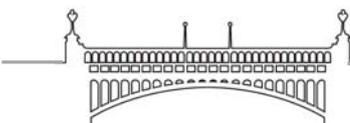


<再生：まちづくりの活発化>

- 市制100周年事業「堀川大改修」
- マイタウン・マイリバー整備事業
- 市民団体等によるにぎわいづくり

将来

<パートナーシップによる堀川まちづくり>



2) 堀川が抱える課題

これまでの移り変わりを踏まえ、堀川が抱える課題を整理します。

堀川まちづくりの背景と現状

- 堀川は名古屋の歴史を伝える貴重な資源であり、その沿川には堀川開削からの歴史・文化を伝える資源が多く点在します。
- 堀川総合整備構想などに基づく河川整備が実施され、護岸やプロムナードなど沿川空間の整備が進められています。
- 都市計画マスタープラン等の既定計画に基づいた取り組みが進められるなど、沿川の各地区でそれぞれの特徴を活かしたまちづくりが実践または計画されています。
- 現在、多くの市民団体等が個別に堀川を中心に活動しており、団体間の連携による取り組みもはじまりつつあります。



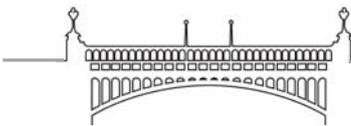
課題の整理

- 堀川周辺に残る多くの歴史・文化資源を掘り起こし、それらを活かしたまちづくりを進めることが求められます。
- これまでの河川整備の蓄積を活かし、河川及び沿川空間の有効活用を図っていくことが求められます。
- 堀川周辺のまちづくりと一体となった取り組みの展開による、堀川を軸としたにぎわいの創出が求められます。
- 持続可能なまちづくりを推進するため、堀川を中心に活動する市民団体間の連携を深めるとともに、民・産・学・官の多様な主体との連携によるまちづくりが求められます。



うるおいと活気の都市軸・堀川を再び





3章 構想の理念



1. 基本理念

堀川まちづくり構想は、これまでの「うるおいと活気の都市軸・堀川を再び」を理念に掲げた「堀川総合整備構想」などの理念を継承し、人々の暮らしやまちづくりと密接に関わり、うるおいや活気をもたらしていた堀川を再び実現することをめざしています。そして、名古屋城築城からまちの歴史と共に重ねてきた堀川の歴史、周辺の歴史・文化資源、水や緑の自然を感じられる空間、堀川に関わる人々の活動など、堀川の持つ魅力やポテンシャルである『堀川力』の一層の向上を図っていくものです。これまで引き出し・活用しきれていなかった「堀川力」に「ひと（多様な主体）」と「まち（地域、都市）」を“掛け合わせる”ことによってそれらが“つながり”、相乗効果となって新たな魅力が生み出されます。周囲のまちをあわせた堀川のあちらこちらで、様々な主体による堀川力向上の取り組みがなされて魅力が生み出され続けることで、堀川の発信力や人々を惹きつける求心力が高まり、堀川が活気とにぎわいに溢れた都市軸として輝き、市民の誇りとなることをめざしていきます。

“うるおいと活気の都市軸・堀川”を再び

堀川 × ひと × まち

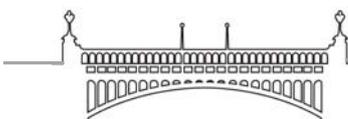
つながる

つながる

ほりかわりよく

★堀川力とは

堀川が、名古屋のまちの発展に大きく寄与し、市民生活を支えてきた歴史ある大切な川であることを再認識し、開削からの400年で培われてきた長い歴史や豊富な文化資源、また、水や緑の自然資源といった堀川がもつ魅力やポテンシャルを「堀川力」と定義します。



2. 堀川力の向上に向けて

以下の3つの視点に基づいて「堀川」と「ひと」と「まち」とのつながりを深め、「堀川力」を一層向上させることで、基本理念の実現をめざします。

① 利活用：川の効果的な利活用

「堀川総合整備構想」などに基づく、これまでの堀川整備の蓄積を活かし、堀川における様々な活動が一層活発に行われるよう、河川の空間利用の障壁となる法規制への対応や人材面、資金面などの活動上の課題への対応を図り、河川及び沿川空間の一層の効果的な利活用を促していきます。

②まちとの一体性：まちづくりと一体となった取り組み

これまで川に関するものが中心だった堀川での活動と他分野や周辺のまちとの関わりを強化することにより、周辺のまちづくりと一体となった取り組みを推進するとともに、環境美化、歴史・文化、緑化、交通・舟運、観光、市街地整備など堀川を舞台とした多様な分野との連携を促進し、総合的なまちづくりの観点から取り組みを展開していきます。

③連携：連携による推進体制の構築

堀川では、一部では既に、市民と行政がうまく連携しながら活動している例も見られます。このような取り組みをさらに広げるとともに、多くの市民、団体などが連携することによって、それぞれの得意分野を活かしながら不得意分野を補完しあい、効果的に取り組みを実践していけるように、堀川に関わる各主体がつながる推進体制を構築し、連携を強化していきます。

